

4章

【問題】（演習／共通問題）

出典：西谷修『世界史の臨界』／九州大学 09年

文章略解

〈近代化〉は非ヨーロッパ地域が植民地支配を免れたり隷属的地位から脱したりする方途として現れた現象であるが、非ヨーロッパ地域はあくまでもヨーロッパが規定した〈世界〉の中での「独立」を確保することとなった。このような形で進行するヨーロッパの世帯化は、地球が球体であったこともあり全体化を成就する。しかし、同時にすべてがヨーロッパ化してしまったために、ヨーロッパは自身の固有性を主張できなくなった。その意味で西洋を主体とする世界化の歴史は終わったといえる。

解答

問1 ヨーロッパからの自立を意図した〈近代化〉自体が、自地域をヨーロッパ的な世界システムへ統合させようとするものであるから。〔59字・解答例〕

問2 自明なものは当たり前のこととして受容されているため、別の思考の可能性を見出そうとしないから。〔46字・解答例〕

問3 「アジア」という呼称自体がヨーロッパ的な世界意識のなかの存在であるため、アジアが自己主張をしても、他者の規定の補強にしかなりえないというジレンマに陥ることになる、と考えている。〔88字・解答例〕

問4 「自由」とはヨーロッパによる植民地支配からの「独立」によって生まれた概念であり、植民地支配を受ける以前の人々は「自由」

とは無関係な生活をしていたに過ぎないから。〔80字・解答例〕

問5 ヨーロッパの普遍性を主張する外部がなくなり、世界全体がヨーロッパ的な世界システムによって統合された。そのため、ヨーロッパはその固有性を主張しえなくなり、したがって西洋を主体とする世界化の歴史は終了したといえるから。〔107字・解答例〕

- 問6**
- ① ㊦ 隷属
 - ② ㊦ 覆
 - ③ ㊦ 昇格
 - ④ ㊦ 搾取
 - ⑤ ㊦ 成就

文章略解

『或阿呆の一生』の冒頭にある「人生は一行のポオドレエルにも若かない」という警句は、助詞「も」の絶妙な使い方によって人生への絶望・嫌悪を鋭く表現すると同時に、芸術もまた救いにはならないという認識をも示している。そこには芥川独特の世紀末の意識がある。こうした世紀末の意識は芥川の後期の作品に特に顕著であり、大正時代の中では際立ったものであった。この意識を見定めることが芥川の小説世界を探るカギになろう。

解答

- 問1 ① 均衡 ② 変容 ③ 筋合 ④ 培養 ⑤ 機微

問2 (a) 人間や社会などに関する本質的な真理を短く的確に表現した文句。〔30字・解答例〕

(b) この世に存在するものの中で文学に最高の価値があると考えること。〔31字・解答例〕

問3 「徹底的な厭世主義」はアナトール・フランスの一面面ではなかったにもかかわらず、芥川の関心はもっぱらその側面に集中し、

その狭い関心を軸に自らの作品世界を構想していたということ。〔88字・解答例〕

問4 (1) 主人公である「彼」の目に映った本屋の店員や客などのみすぼらしさを直接的に照射し、「彼」の感じた印象を際立たせる

効果。〔58字・解答例〕

(2) 「光景」とは芥川の小説に表われた客観的な情景を意味し、「光学」とはその「光景」を描く際の芥川の内なる意識や視角を意味している。〔63字・解答例〕

問5

「暗色」とは芥川自身の抱いていた世紀末の意識がストレートに表現された部分を意味しているのに対し、「明色」とはそうした重圧を緩和して均衡を保つために芥川が取り入れたユーモアや軽快な機知の部分を意味している。筆者はこの「明色」「暗色」の対概念を用いることで、芥川の小説世界における二つの側面の対立を表している。〔153字・解答例〕

※ 解答欄の大きさはテキストのノート欄に示した通り。字数の目安としては、

問2 || 2行分と数えて約30〜45字

問3 || 4行分と数えて約80〜90字

問4 || 3行分と数えて約55〜70字

問5 || 7行分と数えて約140〜160字

ぐらいでいいだろう。解答例も、おおむねそれぞれ解答欄の大きさに見合うように作ってある。

問2 いずれもさほど難解な語ではなく、「何となく意味がわかる」ぐらいのものである。しかしながら、端的に意味を記すことを求められると少々手こずるかもしれない。こうした熟語の意味を明確に把握するためには、日頃から、それぞれの漢字の意味をきちんと確認しておくことが肝要だろう。

(a)の「警句」の「警」は「いましめる」(警察・警告)や「非常事態」(警報)の意味が基本。ただしこの「警句」(あるいは「警論」)の場合「鋭い」の意味になる。「警句」は「アフォリズム」と同義。「本質を鋭く突く文句」の意味。

(b)の「至上」の「至」は「至高」「夏至」などの熟語を想起すれば「もつとも……」という最上級の意味合いであることはわかるだろう。あとはこれに「文学」をあてはめればいい。「文学を最上とする考え方」ぐらいでOK。

問3

傍線部分直前の「それ」の指示内容は「徹底した厭世主義」。その「徹底した厭世主義」とは、70行目の記述にあるように芥川龍之介がアナトール・フランスを評した言葉である。この芥川によるアナトール・フランスの「厭世主義」の評価を筆者(≡菅野)が評して「過敏に反応した」としているのである。その「過敏」の内容を具体的に説明することがこの設問の要求である。

芥川とアナトール・フランスとの関わりについて筆者(≡菅野)の分析は、「フランスは穏やかな懷疑主義においてまず芥川を惹きよせた」(69行目)の部分から始まっている。そしてその後「やがて『厭世主義者』フランスのほうへ、芥川に関心は移ってゆく」(71行目)↓『厭世主義』に暗く閉ざされすぎたのではないか(73～74行目)とされている。この一連の記述を追ってくれば、アナトール・フランスのいくつかの側面のひとつである「厭世主義」の面だけに芥川に関心が集中していた……という筋は読みとれるだろう。この旨が指摘できていれば基本的にOK。

なお、解答例においては「その狭い関心を軸に自らの作品世界を構築した」という記述を添えてある。これは、75行目の『河童』についての記述をくみ取ったものである。このような指摘を添えることでより具体的になろう。

問4

(1) この「傘のない電灯」という表現は7行目に登場するが、その「電灯」が照らし出しているものの描写は後に続いている。「本」の間に動いている店員や客が見え、その「店員や客」は「妙に小さかった。のみならず如何にも見すばらしかった」(8～9行目)とされている。したがって解答にあたっては、単に①「店員や客」が照らし出されたことを指摘するだけでなく、②それらが芥川

の意識において「見すばらしく」映じたことの指摘もほしい。

(2) 「光景」「光学」ともに問題文中に複数登場する語であるが、それぞれの使われ方を見ていけば解答に至れるだろう。「光景」については「本屋（たぶん丸善）の光景」（36行目）などに見えるように、「彼の目に映った情景」ぐらいの意味に受け取れよう。この意味に取ればそれ以外の部分（57行目「人生の退屈な光景に視線をむける……」など）にも適合する。一方「光学」については「世紀末ふうの意識の光学」（50行目）という表現に端的に現れているように、その「光景」を見る人の意識のあり方を意味するものであると読みとれよう。40行目の「光学」という語もこのように「意識のあり方」と解すれば意味が通るだろう。この両者が指摘できていれば解答としてはOK。解答にあたっては、両者の相違が明確になるように心がけたい（解答例では前者に「客観的」という語を添えてみた）。

問5

波線部は39行目、57・58行目に登場しているが、両者が対比して書かれている後者のところを見ていこう。解答にあたっては、「明色」の部分から解釈していった方がラクであろう。「暗色をやわらげるユーモア」（57行目）・「軽快な機知のひらめき」（57～58行目）あたりの記述が後に「明色の部分を塗りこんで」とされているのである。一方の「暗色」に関しては、筆者（菅野）が《みすばらしさの光学》と表現したところの内容を押さえることがポイントになる。これに関しては、55行目の「世紀末の意識を代表させる」という指摘が踏まえられていればいい。この両者が「キンコウをとろうとする」形で芥川の意識の中に存在していたわけである。解答にあたっては、「明色」「暗色」それぞれの性質と、双方の対比が述べられていればOK。

出典：福沢諭吉『福沢諭吉教育論集』「徳育如何」／オリジナル問題

文章略解

教育とは、喩えるならば草木にとつての肥料のようなものである。人間の智や徳の根本は、遺伝的な能力と生育の環境と社会趨勢によるものであり、教育はその発達を助けるにすぎない。人となりが社会的要因に規定されるという点では、社会は智や徳を教える大教場と言ふこともできる。これに対して、学校における教育は、人心の一部分を左右するだけのわずかな機能しか持ち合わせていないということを知っておくべきであろう。

解答

問1 人を育てる際に教育は肥料のように補助的な役割しか持たず、本人の資質や環境の方がより重要だということ。〔50字〕

問2 他勢力との武力紛争に従事していたこと。〔19字〕

問3 子どもは環境に応じて育つということ。〔18字〕

問4 智恵や人徳のような内面の価値でも、社会の影響を受けずに独自に生成されることはありえないということ。〔49字〕

問5 人間の成長において、最も大きな役割を果たすのはその人の置かれた社会的な環境である。人間は、意図的に学校教育を施されなくても、生きるのに必要な知識や道徳を周囲から自然に身につけていく。また、その人元来の素質や能力に成長が規定される部分も多い。これらに対して学校教育は、人間の成長を助ける肥料のような働きをするだけで、人格陶冶に与える影響はごくわずかである。したがって、学校教育を過大評価しない方がいい。〔200字〕

出典：津田左右吉「史論の流行」／一橋大学・10年

文章略解

流行の学問という名称は、学問のあるべきすがたを失っている。というのも、学問の目的とするところは永久に朽ちないものであり、その研究には緻密な考察と熟慮を要するからである。したがって、流行の学術は真の学術ではない。流行に流される世間の人々は批判の能力に乏しく、わずかな価値もないものをも賞賛する。その名声を求めて多くの人物が集まるが、淘汰の末に残るのは、流行にかかわらず深く知識を蓄えた者のみである。世間の人々はただ飽くなき好奇心に駆られて新奇のものを求める。そこにすぐれた才能を持つ人物がチャンスを求め、模倣の巧みな人物が後を追ったり、平素の研究がたまたま注目を集めたりする。こうして流行が生まれるが、流行が去った後には、価値のないものがあちこちに散乱しているだけである。流行の学術は少しも役に立つところがないとはいえ、その学術(の分野)が世間の関心を引くことになる。もし真に学問を志そうとする者は、俗世間を脱して世間の流行の盛衰を問題にしないことが必要である。

解答

問1 世間の風潮とともに変わる「流行」は、永遠に変わらない探求を目的とする「学問」のあり方に反するから。(49字)

問2 流行が去った学問分野に、価値のない研究成果ばかりが残る状況。(30字)

問3 「流行の学術」はその学問に世間の関心を惹きつけることもあるが、批判的能力の乏しい世間の人々が好奇心に駆られて新奇なものを追っているだけであり、不朽の探究を旨とする学問からすれば、真の学術とは言えない。(100字)

問1 傍線部の理由説明問題。まず語句の意味から見ておくと、「当を得^うず」というのは、「当を得（＝道理にかなう）」の対義語で、「道理に反する」ことを意味する。そして、「道理」とは〈ものごとの〉あるべきすがた」ということだから、「当を失するの言」とは、〈ものごとの〉あるべきすがたに反した言葉」ということである。傍線一は、直前の「流行の学問」という言葉に関して言っているので、これは要するに、「流行の学問」という言葉は、〈学問の〉あるべきすがたに反した言葉である」ということを言っているのである。

では、筆者がどのように言う理由は何か。これは、筆者が〈学問のあるべきすがた〉について説いている箇所から考えていけばよい。すると、「その（＝各分野の学問の）目的とする所は千古に渉^{わた}りて朽ちざるにありて」という記述が見つかる。これは、〈各分野の学問の〉目的は、永遠に朽ち果てることのないところにあつて」という意味である。ここからは、〈どんなに年月が経っても変わらないもの〉こそ学問の本質だ、という筆者の学問観を読み取ることができよう。この学問観からすれば、「世潮の変遷」に伴って移り変わるといふ「流行」は、学問のあるべきすがたに反していると言わざるを得ない。だからこそ筆者は、「流行の学問」といふ表現が「当を失するの言」だ、と述べているのである。

問2 傍線部の比喩表現を説明する問題。傍線二には、「潮引き波去るの後」（ a ）、「塵埃瓦礫紛として八方に散乱する」（ β ）という

二つの比喩表現があるので、まずはそれらの意味を明らかにしていく。

まず a だが、これは「流行の波濤」（ l 13）という表現を踏まえて考えればよい。ここで話題になっているのは、もちろん〈学問における「流行」のことだから、 a の「潮」も「波」も、ともに「流行」している学問（の分野）〉と考えることができる。つまり、〈小説の「波」〉〈和文の「波」〉〈漢文の「波」〉と来て、この時には〈史論の「波」〉が来ている、というわけだ。よって a は、〈（その学問分野の）流行が去った後〉ということだととらえられる。

次に β だが、「塵埃」は〈ごみ〉、「瓦礫」は〈瓦や石ころ〉の意。それらが「紛として（＝入り乱れて）八方に（＝あちらこちらに）散乱」している、というのだから、〈どこを見ても、価値のない無用なものばかりが散らばっている〉ということである。

この「塵埃」や「瓦礫」は、 a で見た「潮」や「波」が残っていたものなのだから、〈流行の学問が残した〉価値のない研究成果〉を指していると見ることができよう。

以上から、傍線二の比喩表現は、〈流行が去った学問分野に、価値のない研究成果ばかりが残る状況〉をたとえたものだということができる。

問3

傍線部の内容説明問題だが、「問題文全体の内容を踏まえて述べ」ることが求められているので、実質的には要旨要約問題である。筆者は「流行の学術」に対して概ね批判的であるが、肯定的な側面についての言及もあることに注意してまとめたい。

まず、傍線Aを含む一文全体を見ると、「流行の学術は恐ろしくはこれ真の学術に非るなからんか（＝流行の学術は、真の学術ではないのではないか）」というように、「流行の学術」を批判しているわけだ。その理由は、直前から読み取ることができる。すなわち「流行の学術」は、「その目的とする所は千古に渉りて朽ちざるにありて」（ℓ8）という〈学問のあるべきすがた〉と、「その攻究（＝考究）には仔細の考察と静慮とを要するなり」（ℓ8～9）という〈学問の本来的な性質〉に反しているからである。したがって、「流行の学術」が、具体的にどのよう〈学問のあるべきすがた〉や〈学問の本来的な性質〉に反している（と筆者が述べている）のかを、本文の中から読み取り、まとめていくことになる。

そこで注目できるのは、「読者の趣味概ね泛として定まるところなく批判の能力に乏しく」（ℓ13～14）という箇所、そして「ただそれ好奇心の飽くことを知らざるや何れの辺にか新奇を求めんとし」（ℓ17～18）という箇所である。「読者の趣味……定まるところなく」と「好奇心の飽くことを知らざる」、「何れの辺にか新奇を求めんとし」という記述は、いずれも「読者」＝「世人」が〈定まった見解もない状態で、好奇心のおもむくままに、新しく珍しいものを追い求めようとする〉ことを指しており（ a ）、そのように行動する彼らは「批判の能力に乏しい」、とも批判している（ β ）。これら二点が、「流行の学術」に対する批判の柱となる。一方、肯定的な側面だが、「これ（＝流行の学術）によりてその学が世上の注意を惹くに至るあるは疑ふべからざるなり」（ℓ21～22）とあることに注目したい。つまり、〈流行の学術の存在によって、その学問分野が世間の人々の関心を引くこともある〉と述べているのである（ γ ）。

以上の $a \cdot \beta \cdot \gamma$ を盛り込んで解答していくことになるが、肯定的側面と否定的側面を単純に並列するだけでは、筆者の考えをまとめたことにはならない。ここは、〈なるほど、たしかに〉 γ という肯定的側面もあるが、 $a \cdot \beta$ という否定的側面がある（という譲歩の構文を用いて、筆者が力点を置いているのは否定的側面のほうであることを明示し、「流行の学術」は真の学術ではない）という筆者の主張がより明確になる形でまとめるとよいだろう。

現代語訳

多事多端な時期が過ぎて、（中将は）お馬でたいそう人目を忍んで、黄昏の頃に（尼上の邸に）紛れ入りなされると、すぐそばの柳の木陰に（葉が）ひどく茂って（いて）、（そこなら人影を）ほとんど見分けられそうもないので、（邸内の）様子もうかがいたく（思つて、（その）木陰に移り寄ってしばらくお聴きになる（「聞き耳をお立てになつて」と、箏の琴を何気なく気ままに弾く爪音が、（山里という）所柄のためか、（中将が琴の音を）広く聞いて耳に慣れさせていらつしやる都の中には、ほとんど並ぶものがないほど（趣がある）と思わず驚いてしまうのは、（それが）この上なく美しい音なのであるう。（中将は妹の）姫君のお琴の音をとても素晴らしいと得意にお思ひだったが、これは（それに）まさつてするように聞こえるが、実に愛らしくかわいらしいものの、本当に奥ゆかしい弦を揺する音が、とてもよく（妹の琴の音に）似通つてると聞こえた（「思われた」）ので、思いがけず心を奪われて、（音に）近い小柴のもとに思わず移り寄つて（中を）ご覧になると、簾なども張り出してあつて、（部屋の）内側もあらわに見える。

若い女房ばかり五六人ほどが、（部屋の外の）簀子にまであふれて座つていて、（桜の）花の（咲くまでの）じれったさを待つている（「早く咲いてほしいと待つている」）のであろう。（箏の）琴を弾く人は柱に隠れて（いる状態で）、（姿が）完全にも見えない。こぼれかかっている前髪・髪型など（何とも）言い尽くしようがない（ほど素敵に見える）のは、（自分の）移りやすい（「すぐに恋に落ちる」）心の思い込みかと、努めて見つめるが、まったく見たこともない（ほど美しい女性のような）気がする。（あの）女三宮の（邸の）庭の植込みをご覧になつた（「女三宮と逢つた」）夕べにすっかり尽き果ててしまった（と思われた恋の）魂が、まだ残つていたのであるうか、ただ一瞬の間に身も碎けた気持ちがあった。度を過ぎてこのようである（「あまりに劇的な一目惚れをする」）ことにつけて、恐いほどであるよ。（この女性が本当は）何かの化け物で、^{*}面と向かつたならば、その（際の）顔立ちが不気味であるような場合（はどうしよう）とさえ（思われて）、（それでも）都の鬼門に当る）怪しい土地柄は（化け物が出る）こともありうると思われて、（それほどまでに、今日目している情景が）現実とも思われぬよ。奥の方から人が来て何と言つたのか、（張り出していた）簾を下ろすとともに（簀子にいた）女房たちも（中に）入ってしまったのは、（何とも）言いようがない（気持ちになる）よ。「それにしてもこの誰

であろう。ここの尼上には子がいるとも聞かなかったのに、(夫の) 故中納言が亡くなってこれほど久しくなったのに、あれはどこにいた人なのか」と思うと、(彼女について知りたいという思いに) ただただ堪えがたい。

(その) 心の乱れで、このままでは(その気持ち)をおさめることができるはずもないけれど、先ほどの戸口のあたりに出ていって、咳払いをなさると、(邸中から応対に) 宰相の君を出してくる。(中将は)「思いがけない雪に迷って、不躰な格好でやってきましたお詫びも、早く申しあげようと思いましたが、新春で、どうということもない行事に取り紛れて(叔母上のもとに伺わなかった) 不調法を、咎め立てなさらなかった(お気遣い)も、(この格好では) 意味なく(なってしまいました)」など(挨拶を)おっしゃるのだが、(応対に出た宰相の君は)ひどく引つ込み思案な人で、(すぐに)言葉を続けて(返事を)申しあげられず、ただ「とても恐縮なことには、(お返事は尼上) 自ら申しあげなければなりませんのに、体調の悪さが普段から宜しくない状態になってばかりでありますので、静養いたしておりますが、(ご挨拶も申しあげないで) 気が引けて(ごさいます)」とだけ、かすかに伝え申しあげる息づかいもとても(弱々しく)可愛らしいので、(中将は)これが先ほどの女性だろうか、ますます心を寄せきって、「いやあ、(尼上との) 親族の関わりは浅くないものと思っておりますのに、全然(私を) 数のうちに入れてお考えいただけない(「相手になれない)のは、残念な様子でございます)。」

武蔵野の……(あの古人の通った) 武蔵野の古い跡のある道ならば、(そこを) 通う気持ちもあるでしょうに」。

何気なくお嘆きになる(中将の) 言葉も、(その) 人柄は格別(なもの)と聞いて惚ばれる。

いかでかは……どうして通い慣れたりもできましようか。武蔵野の古い野の道も行く先が知れない(「どこへ通じているのかわからない)のですから。

などと(宰相の君が返事を)申しあげていると、尼上が、例によって数珠の音を古めかしく(鳴ら)して、(そこへ)寄っていらっしゃる気配があるので、(中将は)今少し真面目(な様子)でもっともらしく(お言葉を)申しあげる。世間並みの(当り障りのない)お話し(「世間話)も、とてもこまごまと(「丁寧に)語らい申しあげなさりながら、(夜が)更けゆくまでお暇なさらない。

〔訳注〕 都の鬼門に当る……音羽山は都から比叡山に向かう途次にあるが、比叡山は都から見て艮(東北)の方角にあり、陰陽道でい

う鬼門に当る。延暦寺は鬼門封じの意味合いもあって比叡山に建立された。

問1 (1) 思わず／衝動的に (2) とても恐縮なことには (3) きまりが悪く存じます

問2 中將が琴の演奏を広く聞いて耳に慣れさせていらっしやる都の中には、ほとんど並ぶものがないほど趣があると思わず驚いてしまふのは、それがこの上なく美しい音なのである。

問3 柱の陰で琴を弾いている女性の顔立ちを見る機会が失われてしまったから。〔37字〕

問4 先々のこともわからないのに親しくはできないということ。〔27字〕

問5 宰相の君に心を奪われ、関係を深める機会を伺っていたから。〔28字〕

出典：『住吉物語』二下巻三七 琴の音に導かれて」の全文。ただし、人物呼称に一部改変あり。 / 島根大学

現代語訳

日も暮れたので、(少将は)松の木の下で(住吉の岸の姫松人ならば…の古歌を思い出して)「(この松が)人だったら(姫君の行方を)問うことができるのに」などと、(松の木を)ほんやりとながめてたらずみ思い悩んでいらっしやった。そうでなくても旅の空は悲しいのに、夕波千鳥は悲しげに鳴きながら飛んで行き、岸の松を吹く風が何となく寂しい空で(松を吹く風と)一緒になって、琴の音がほのかに聞こえて来た。この琴の音は、律(の音階)で演奏され、盤渉調(の調子)であたり一面に響いて、この音をお聞きになっていた(少将の)お心は、とても言い尽くせない。

「ああ、すばらしい(琴の音であることだ)。人の出す音ではよもやあるまい」などと思いつながら、(少将は)その音色に誘われて、何となく(琴の音のする家に)立ち寄ってお聞きになると、釣殿の西面に、若い(女の)声、一人、二人程(の女の声)が、聞こえてきた。琴をかき鳴らす人がいた。「冬は、(住吉の土地は)なじみにくいものでした。このごろは、松を吹く風や波の音にも心引かれるようになりました。都では、このような土地も目にしませんでしたのに、ああ、ああ、ものの情趣の判っていた人々に見せたいものですよ」と、語り合って、「秋の夕方は常よりも、故郷を離れた旅の空の下にいるのがしみじみとしていることよ」などと、美しい声で(今様を)口ずさんでいるのを、(少将は)侍従であるかと聞いて思い、「ああ、意外なことだ」と、胸が騒いで、「(しかしこれは侍従だという思い込みで)そう聞こえるのだろうか」と思ってお聞きになると、

尋ねべき…訪れてくるはずの人もないこの渚の住の江で誰を待つという松風が絶えず吹いているのだろうか
と、口ずさんでいるのを聞くと、姫君(の声)である。

「ああ、すばらしい。御仏の効験はあらたかなことだ」と(少将は)嬉しくて、簀の子に立ち寄って、叩くと、「どなたでしようか」と言つて、侍従が透垣の隙間からのぞくと、簀の子に(少将が)寄りかかって座つていらっしやるお姿が、夜目にもはっきりと見えたので、「あら驚いた。少将さまがいらっしやいます。どのように申し上げますか」と言つと、姫君も、「本当に、まあ、(このような所にまでいらっしやるなんて)。(私のことを)思い続けていらっしやるのでしょうか。そうはいっても、人が見聞きしたら不都合で

しよう。私はいないと申し上げなさい」とおっしゃったので、侍従は、出て行って（少将に）、「どうして、（こんな）辺鄙な土地までいらっしやったのですか。ああ、とんでもないことですが、その後、姫君をお亡くし申し上げて、（その悲しみを）慰めることができないので、このように（住吉に）までさすらつてきております。（少将様の御姿を）拝見すると、いよいよ昔のことが恋しくなってきました」などと口からでまかせを言っていて、（そうはいつでもそれなりに）悲しくなり、涙が（目の前が）暗くなるぐらいあふれてわけもわからなくなると、少将も、いつそう（涙の）こみあげてくる心地におなりになる。「姫君の事を慕って来たのに、うらめしくも、（侍従は）おっしゃるものだなあ」と、「（姫君の）お声まで聞いたのに」と言っていて、（長谷寺に参籠したままの）浄衣の御袖に顔をお押しあてになって、「うれしさも辛さも半分です」とおっしゃると、侍従は、（それも）道理と想って、「それにしても（まずは）お休み下さい。都の事も聞きたいので」と言っていて、姫君に相談すると、「めつたにないことです。（ここに）誰も彼も、しみじみとした情感を理解なさいませよ。まず、（少将に）こちらへお入りあそばすように、申し上げなさい」と言うと、侍従は、「なれなれしく、いかにも失礼ですが、その聞きなじんだ声に（免じてお許し下さい）。旅の（人をお迎えする）場合は、ただもうこうなのでございます。どうぞお入り下さいませ」と言っていて、袖をつかまえて中へ入れたのだった。

解答

問1 アⅡこの音をお聞きになっていた少将のお気持ちは、とても言い尽くせない。

イⅡものの情趣が判っていた人々にこの住吉の土地を見せたいものです。

ウⅡいつそう涙のこみあげてくる気持ちがなされる。

問2 訪れてくるはずの人もないこの渚の住の江で、誰を待つというので松風が絶えず吹いているのだろう。

問3 a・bは、よい方に程度がはなはだしい意味に使われているが、cだけは悪い方で使われている。（44字）

問4 姫君の居場所を尋ねあてたことがうれしく、姫君に会えないことが辛いと言っている。（39字）

問1 傍線部アの「これ」は、指示語を含む文節を受ける用言が「聞き給ひ」とあり、直前の一文に「琴の音く聞こえけり」とあることから、「琴の音」であると考えられる。「給ひ」は「給ふ」の連用形で、それがイ段で終わっているため、四段活用動詞。四段の「給ふ」なら、尊敬語の「給ふ」で、ここでは補助動詞。「けん」は過去推量の助動詞で、体言に続いているから意味は『過去の婉曲』。「む」の婉曲と同じことだが、物語で文末が「けり」で止まっていることから、いわば時制の一致のような形から、「む」を「けむ」に変えているだけ。「おろか」は「未熟だ、うかつだ」の意味。以上から、傍線部の直訳は「琴の音をお聞きになったような心は、言えは愚かである」となる。「言えは愚か」というのは、つまり「言ってもムダ」ということだ。また、「これをお聞き給ひけん」は、それまでに特に主語の提示がないこと、本文の前の注で「姫君を捜し求めて」とあるところから、この動作主は「少将」だと判る。

傍線部イの「心あり」は「感情を持っている、情緒を解する、道理分別がある」という意味の連語。ここでは、住の江の景色の美しさに対する発言である点をおさえることだ。住の江の景色に対して「あはれあはれ」「見せまほしきよ」、つまり「こんなすばらしい景色を見せたいものだよ」と言っているのだから、この景色を見せたいと「侍従」たちが思う人は、景色の美しさを理解するに十分な感受性を持っていないなければならない。従って、「心あり」は「情緒を解する」と訳せるわけである。この意味をつかむことがポイントで、後は簡単。よって、傍線部は「情緒を解する人々に（この美しい住の江の景色を）見せたいなあ」となるだろう。「見す」は他動詞なので、「何を」という目的語を補った方がよい。目的語は、右のことから必然的に把握できるはず。

傍線部ウの「もよほす」は、現在使われている言葉と同じ。この傍線部の一行前に、「涙のかきくれてものもおぼえぬに」とあるので、「侍従」の涙につられて「もよほ」されたものであると判る。涙に「もよほさ」れたものは、当然「涙」である。これは傍線部に上接する主語に「も」が付いていることから判るはず。これは「少将も（同様に）」という同一性を示す係助詞「も」であるからだ。この補入が、問題のポイントで、後は簡単だ。「いとど」は程度の副詞で、「いよいよ、ますます、さらにいっそう」などの意味を持つ。よって、傍線部を直訳すると「（少将も）いっそう涙の促される気持ちにおなりになる」とでもなるだろう。

問2 「なきさ」は濁音で示されているので、すぐには何と掛詞になっているのか、つかみづらいかもしれない。古代には濁音記号「ゝ」がなかったため、すべて清音の文字で記されていた。ここでも「なきさ」と書き換えてみると、「なきさ(渚)」と「なき(無き)さ」

と、二種類の単語が見えてくるだろう。つまり、「訪れてくる人も」なき」と、「渚（の住の江）」を掛けているわけである。「松風」は、（誰を）「待つ」と「松風」をかけている。設問での注意は、この二点を見抜くことを要求しているわけである。歌句の方では「らん」は現在推量の「らむ」の撥音便で、「ゝしているのだろう」と訳せる。「べき」は、推量の助動詞「べし」の連体形でここでは《当然》を表し、「ゝするはずだ」と訳せる。また、下に打消を伴って「ゝできそうにない」という《不可能》を表す場合もある。ここでは「無い」と「渚」を掛けている「なきさ」が打消の意味を担っている。

掛詞のある歌を掛詞の両義を採って訳す場合、まず「場合分け」をして、それぞれの訳を考え、最後に統合する形で仕上げなければよいだろう。ここでは「尋ぬべき人もなき」↓「住の江に↓たれ待つ」と「なきさの↓住の江に↓松風の↓絶えず吹くらん」と場合分けをしておき、「尋ぬべき人もなき」↓「住の江に↓たれ待つ」↓「松風の↓絶えず吹くらん」と統合する。「尋ぬべき人」がないので、「たれ」を「待つ」のだろうか（＝らむ）という推量が出てくるのである。以上の点から、この歌を逐語訳すると「尋ねることができるような人がない渚である住の江に誰を待って松風が絶えず吹いているのだろうか」となる。これをもっとこなれた形にしたのが《解答例》である。

問3

語句識別の問題。傍線部の「あな」は感動詞で、意味の識別にはあまり関係がない。従って、「ゆゆし」が問題点として絞られてくる。この「ゆゆし」は、程度を持つ形容詞で、「懼れ多くて慎まれる（憚られる）、忌まわしい、不吉だ、縁起が悪い」などの意味が中核で、ここから「よくも悪くも」程度が甚だしい」場合にも使われるようになった。このことから、傍線部の「ゆゆし」が「よい」意味か、「悪い」意味かで識別できることが判るだろう。これが解答の観点になるはずだ。この観点に立って各傍線部をみてみよう。

二重傍線部 a は、「『あな、ゆゆし。人のしわざには、よも』などその音に誘はれ」とあるので、琴の音を聞いた少将が琴の音に感動した気持ちを表す。従って、これは『よい』意味の「ゆゆし（たいへん素晴らしい）」だと判る。

次に二重傍線部 b は、「『聞きなしにや』とて聞き給へば、……と、うちながむるを聞けば、姫君なり。とうれしくて」とあるところから、「姫君」の声を耳にした「少将」の喜びの気持ちを表す。従って、これは『よい』意味の「ゆゆし（たいへん嬉しい）」だと判る。

よって、必然的に残った二重傍線部 c が答である。ちなみに、これは「……あな、ゆゆし。その後、姫君うしなひく侍るになん」

とあるから、直前の話文で侍従が姫君から「我はなし」と言うように頼まれたことを受けて、「姫君が死んだ」と嘘をついた部分に使われているので、悲しみを表す言葉である。従って、これは『悪い』意味の「ゆゆし（たいへん悲しい）」になる。

問4

波線部の一行前、傍線部ウの主語として「少将も」が示されている。この主語が、以下の地の文「くと、くとて、浄衣の御袖を顔に押しあて給ひて、くと、のたまへば」まで続き、「のたまへば」という順接の確定条件を挟んで「侍従、ことわりにおぼえて」と主語が変化している。ここから、波線部の話者は「少将」だと判る。つまり、「君の事をばくとたまふものかな」と「御声まで聞きつるものを」も同様に「少将」の発言である。これらの発言から、姫君の声を聞いたので、少将には姫君がそこにいることがすでに判っていたのである。やつと探し出した姫君の居所が判れば「嬉しい」のは当然である。しかし、姫君がそこにいるのは判っているのに、侍従に「姫君うしなひ奉りて」と言われて「姫君」には会えないのである。これが「辛さ」の部分だと考えられよう。従って、「姫君の発見と姫君との対面ができないこと」の両方を意味する叙述を述べれば正解になる。